

# 能登に初夏を運ぶ のとキリシマツツジ

## 能登の風物詩

5月の連休前後にかけて新緑の中で真っ赤に燃え盛るように咲く花がある。能登に初夏を運ぶといわれる「のとキリシマツツジ」だ。能登の風物詩とも呼ばれ、先人の手によって鹿兒島の霧島から江戸時代に渡ってきたのがその由来といわれる。北前船で運ばれたとも、旅人が持ち帰ったとも推測されるが、真実は定かではない。

ツツジの栽培は、寛文から延宝年中(西暦1661〜1681年)に流行し、この時代を中心に数多くの新品种が現れた。中でも明暦2年(西暦1656年)に江戸に入った「霧島」が最も高く評価され、多くの人々に好まれた。これらが「江戸キリシマ品種群」と呼ばれ全国に広まった。能登の霧島ツツジということで、「のとキリシマツツジ(以下、キリシマ)」と呼ばれている。能登に咲く花はたくさんあるが、「のと」の冠がついた花はキリシマだけであることから、

古くから能登の人間に深く愛されてきたことがうかがえる。

キリシマにはいくつもの種類があるが、真っ赤な色をした、一重咲きでオシベが5本、花は小型で花弁の先がやや細長く丸いものが江戸キリシマツツジの代表格で、「本霧島」と呼ばれる。能登で栽培されているものの多くはこの種類である。

## キリシマをたずねて

七尾のまちを走ってみると、確かにあちらこちらで深紅の花が目に見え込んでくる。ただ、樹齢が100年を超えるものとなると、数は少ない。キリシマは適度な水分、水はけ、日当たりなどいくつかの条件がそろわなければ成長しない。そういった理由から家の裏庭の傾斜地に栽培されていることが多い。そして、裏庭にある理由がもう一つあるという。キリシマは実のならない観賞花なので、百姓には贅沢な花だったということ、家の裏庭で大切に育て、ひそかに楽しんだのではないかと。何とも能登の風土を表す花である。

キリシマを育てるには、雨や風に耐えることもちろんのこと、冬には積雪で枝が折れることも多く、添え木をしたり、雪つりも必要となる。適切な排水管理、土壌改良、肥料の

加減にまで細かな神経を使わなければならず、それを怠ればたちまち白いカビのようなコケが生え、枝は枯れ始め、みるみると木の勢いは衰えていくという。実際に訪問した何軒かのお宅でもそういった例が見られ、行く先々で手入れの大変さを聞かされた。

中島町藤瀬に藤津比古神社という神社がある。その裏庭には3株のキリシマが天を仰ぐように咲き誇っている(表紙写真)。29代宮司の尾澤清量さんに話をうかがうと、樹齢はわからないが、人からは200年とも300年ともいわれるという。株の大きさや枝ぶりを見てみると、長年の経過が感じられる。尾澤家のキ



気心の知れた仲間と酒を酌み交わす地元の人たち

## まちでみかけたのとキリシマツツジ



中島町藤瀬 山崎仁左工門さん宅



石崎町 野崎昇賢さん宅



佐野町 坂口秀雄さん宅



庵町 瀬川強さん宅

リシマも例外ではなく、手入れにはご苦労されているようで、白いコゲには毎年頭を悩ませているという。そんな中でも楽しみもある。毎年5月7日には地元の祭りがあり、それが終わった後に地元の人が見に来る慣習が30年以上も続いているという。今年も10人ほどが集まり、キリシマを眺めながら酒を酌み交わす。深紅のキリシマに負けず劣らず、真っ赤に顔を染め、七尾の未来を熱く語る男たちの顔がそこにはあった。

### ふるさと七尾の魅力

その昔、ごこの家でも珍しくなかったキリシマが今注目を浴びている。石川県や奥能登では「赤」をテーマに観光地のPRをするといった動きもある。みなさんの家の近くにもあまり知られていないが大切に育てられているキリシマがあるので、キリシマに限らず、今まで注目されなかったものが見直され、一躍脚光を浴びるという例は決して珍しくない。みなさんの周りにあるごく当たり前のものが驚くほどの価値をもたらす可能性を秘めている。今こそふるさと七尾の魅力探しをしてみませんか。そしてその魅力を発信していきましょう。

#### IRODORI COLUMN



キリシマツツジはツツジ科ツツジ属の野生種であるミヤマキリシマとヤマツツジが、交雑して生まれた品種とされる。「のとキリシマツツジ」は、その一品種とみられ、特に能登地方に広く分布する。古株の中には樹齢300年を超えるものもあり、花は一重咲き、二重咲きなど赤系6種類、紫系2種類に分けられる。

今回のななおの彩りは、宝達志水町以北の4市5町の共同企画により、能登を発信するために「のとキリシマツツジ」を統一テーマとして行われました。

(参考資料)のとキリシマツツジ写真紀行など